

視覚芸術コースに携わった7年を振り返って

～アート・リベラルアーツへの道～

Reflecting on the seven years working in the Visual Art Course

— A way toward Art, Liberal Arts —

野島 泉里

Senri NOJIMA

崇城大学芸術学部視覚芸術コース非常勤講師

Part time Teacher, Visual Art Course, Faculty of Art, Sojo University

はじめにのまえに

昨年度の紀要に「視覚芸術コースに携わった6年を振り返って」という小論を提出することを試みましたが時間切れで断念しました。昨年の紀要執筆から1年の間も授業があり、新しく考えたこともありました。論旨が幾分明快になってきたこともあって、昨年までの記述の冒頭にこの一文を加えさせていただきたいと思いました。それによって全体の記述に骨格が生まれるように思います。

これまで学生の皆さんと話す中で、特に制作系の学生の心象に、私が美大生であった30年以上前とそれほど変わっていないと思われることがあります。それは、皆概して美術で生活することは難しいと思っているということ。これは一見単純な真実のように見えます。毎年多くの美大生が卒業していく中、美術制作を生業にする人はわずかです。確かにこの事実は美術で生計を立てることの難しさを物語っています。

しかし、このようにも思うのです。こんなに珍しい才能の芽を持った人たちが作家になることだけを成功と考える必要はない

のではないかと。つまり彼らはいろんな可能性を秘めているのです。

その問いに対しては、美術の本義に立ち返ればおのずと答えが見えてくるかもしれません。創造的であるということ、様々なものに感性を向けて洞察する力があるということであり、柔軟であり、忍耐強いということなどもあげられます。美術には美術の本懐がありますが、創造性ということについていえば、各分野にも通底する知見が数多く存在します。美大の役割の一つとして、美術の特質を活かしつつ、あらゆる社会世界で創造性を発揮できる人間を育成することにあると仮定して、考えを進める道もあるかもしれません。

私は以上のような教育理念を作るとすれば、「アート・リベラルアーツ」と呼んでみたいと思います。リベラルアーツについては本稿内でも触れていますが、もともと一国のリーダーを育てるための教育理論です。そこには自分の専門にとどまらない、大きな視野を持った人間の育成が志向されています。

担当の永田郁先生を中心に、視覚芸術コースで模索してきたことは、図らずもこ

の方向性に少しずつでも向かっていたのではないかと私は思っています。以下の記述はその試みの数ある失敗と喜びの歴史です。最後のまとめの部分では、アート・リベラルアーツの未来を展望してみました。本稿はどちらかと言えば理論の文ではなく、テーマとなっているアート・リベラルアーツという理念へと迫るプロセスをドキュメント風に記したものです。散文の寄せ集めのように構成等に違和感もあるかと思いますが、ご高閲くだされば幸いです。

尚、本稿の論旨は、私個人の考えであり、コース全体としての見解ではないことを付言しておきます。

最初の記述を「エス君の航海日記」から始めてみたいと思います。この小説風の一節は、本稿への導入と考えていただいて結構です。それから本稿に関する私の現在の心象でもあります。最初に読んでいただいて、また本稿を読み終わった後に戻っていただいてもいいかもしれません。

エス君の航海日記

「おーい、この船には羅針盤がないぞー！」

「仕方がない、お前は星の位置を見ろ、君は潮目を見るんだ！ 何とかするんだ。必ず目的地にたどり着くんだ。」

「星を見てどうするんだ？ やったことないからわからないよ。」

「俺だってわからん。じっと見てりゃなんかわかってくるだろ！ おい、波から目を離すな！」

船の乗組員たちは奮闘を続けた。数年にわたる航海を経たある日の朝、左舷45度方向に船が見えた。

「おー、あれは洋画コースの船だ。案外同じ方向に進んでいたんだな。」

「こっちを見て見ろ、彫刻コースの船だぜ！」

「日本画の船も見えるぞ！ 芸術文化コースの船も見える！」

全員が甲板に出てきた。

3年生のエス君が船員のジェイに言った。

「彼女です。」

「何！ こんな子、船に乗ってないはずだぞ！」

「船底にある瞬間移動装置で、あっちの船に行ってきました。」

「何だと〜！」（学生のほうが俺たちよりこの船のことよく知ってるじゃねーか。）

ガーガガ、ガー「艦内放送です、艦内放送です、視覚芸術コースの船は航海を終了する、航海を終了する。着岸日の予定は、、、」

「ちっ、シップ搭載AIめ、艦内放送でこんなこと発表するかよー。」

ジェイが舌打ちをする。

「終わってしまうんですか？」とエス君。

「そうだよ。役目を終えるんだ。この船は新しいコースに引き継ぐ。」

「僕たちはどうするんですか？」

「視覚芸術コースで学んだ君たちには、君たちの役割というものがあるんだよ。」

「ジェイさんはどうするんですか？」

「エス君、人生には意外といくつもの舞台が用意されているものなんだよ。次の舞台に上がるだけさ。君たちだってそうだ。生きている限り自分の役割がないということはないんだよ。この船も大きな役目を果たしたんだ。あっちを見てごらん。」

「うわー、でっかい船ですね！」

「あれはある大企業の船だ。あの中には君たちの先輩もいるんだよ。あそこを走っているちっちゃな船がいるだろう？ あれも先輩の船だ。一人でかじを取っている。小さい船の割には大きなアンテナがついているよね。彼はあのアンテナを使って全国にメッセージを発信しているんだ。」

「周りにどんどん船が集まってきました。すごい数だ！ みんなどこに向かっているんだろう。」

「どこだと思う？」

「わかりません。」

(即答するなよ、ちょっとは考えてみろ)

とジェイは言おうとしたが考え直した。素直なエス君をほほえましく思いながら

「それは時代というものだ。」と言った。

「時代かー。僕たちは同じ時代を生きているんですね。」

「そうだ。新しい時代には、君たちの役割は大きい。ほら着岸するまではまだまだやることがいっぱいあるぞ。配置につこうぜ。」

エス君は船の進む方向に顔を向けた。行く手には薄明りの空に朝日がまばゆい光を放とうとしていた。

ガタンガタンガタン。エス君は近くを走

る市電の音で目を覚ました。

「はー、今のは夢だったのか。おっとやべー、もうこんな時間だ。授業に遅れるー。」

エス君は食パンを口に突っ込んで、自転車をこぎ始めた。

はじめに (カリキュラム考)

学生の皆さんに何か伝えよう、あるいはある概念を伝えようというとき、一言で相手がびんとわかればそれが理想だと思えます。それが無理なら言葉を尽くして説明しますが、それで伝わらない場合もあります。あるいは図を示し課題を与えたりして理解できるように試みる。しかし、ある程度の努力で、それが伝わらなければ、その試みはほとんど失敗しているのかもしれませんが。それを教える側が意識しないしていると、学生諸君はただただ苦しい気持ちになります。

上記のことは私自身の経験です。ずいぶん学生にも苦しい思いをさせたに違いありません。いろいろと反省することは多いです。こんな時は、できれば、相手の半歩先くらいのところを指し示すことができればうまくいくようにも思います。一歩進んでしまうとわからなくなってしまう。ここがいつも難しいところだと思います。

例を挙げてみます。雲が好きで、雲をテーマにした作品を作りたいと考えている学生がいます。雲の写真を撮ったり、スタイルフォームを使って、レリーフを造ったり、様々な方法を試しました。写真は高校時代から好きだったので、経験値がありま

す。それ以外の素材は、なかなか苦戦していました。レリーフにしてもまずは彫刻的な技術が必要です。最初のうちは当然ながら技術の不足のほうに意識が向かうので、表現というところまではなかなか到達しません。

そこで私は、普段見ている雲をもっと、いろんな角度から彼に感じてもらうことを意図してみました。雲を見て素晴らしい気持ちになるのはなぜか？ その気持ちに「回路」を開くものに注意を向けるのです。

そこでは比喩というものが役に立つことがあります。私は色紙で自分が思う雲の形を切り抜いてもらう課題を与えました。雲は白いと思っている。しかし赤い雲や青い雲、背景が青で、その前に黄色の切り抜かれたモクモクした形の雲があったらどう見えるだろう。それは実際の雲とは別のものに見えるかもしれません。しかし、もしかしたら、本人が観ている雲のある本質の一部を見ているかもしれないのです。ただこの課題はこの学生を興奮させることはありませんでした。単に彼の注意は別のところに強くあったのかもしれません。

次に、もう一例を示します。ある学生が卒業制作で、蠟をつかってクローバーを作り、それを箱のようなフレームに入れる作品を制作しました。私は彼女にクローバーを納めるフレームの制作への助言を求められました。私は、この箱をこれくらいの大きさに作った時のことを想像してみて、と言うと、彼女は即座に興奮した面持ちになって、「あ、それやりたいです。」と言っ

たのです。彼女は私の言葉で、スケールが持つ意味を理解したのです。この場合の理解とは、いわゆる「アハ」体験だったかもしれません。この作品に至るまで、この学生は様々な課題をこなし、思考を積み上げてきていたのでしょうか。彼女にはそのアイデアを受け入れる準備ができていたといえます。

このように、学生の個々の状況によって、上手くいく場合もあるし、そうでない場合もあります。それが上手くいかないからと言ってそれは学生の責任ではありません。まあ失敗というわけでもありません。

私は、一貫して個別指導を重視してきたので、むしろ、学生に合わせていろいろ課題を変えるのは自然なことととらえていました。しかし一方で、全体として教える側が指し示す方向性のようなものを、形にすることの必要性も感じていたのです。一番大きな理由は、学生に安心感を与えたかったことです。

例えば、これらの諸課題がカリキュラムの中に、的確に位置付けられていたらどうでしょうか。このカリキュラムは、この4年間で、学ぶべきこと、身に付けるべきこと、そしてその目的がしっかりと示されているとします。もしこの課題が、このようなしっかりとした理念が内包された構造体の中に位置付けられていたとしたら。おそらく学生はそれがすぐに理解できなくてもそんなに不安に思うことはないはずです。それはなぜかと言えば、道を示すことによって、今はわからなくてもいつかはわかるようになる、という確信を持つことが

できるからです。そこにカリキュラムの重要性があると考えられます。

カリキュラムは地図とも言えるジグソーパズルとも言えます。基礎としてきちんと身に付けるべきもののほかにも、今はわからなくても将来いつかどこかでその意味がわかる時があるはずだ、というものが混ざっていたりするかもしれません。大事なことは、そのパッケージが向かう方向。つまり、このコースはこんなことを目指しているから、必ずこれだけはやっておく、というものを設定するということでしょう。

このことについては、これまで関係者が議論を重ねてきました。そしていくつかの体制を作ってコースとして授業が進められてきました。そういうコース全体の環境の中で、私にとって、こうではないかという現在におけるビジョンらしきものも、経験の積み重ねから生まれてきました。それについては本文中で省察します。内容としては、これまでの実践内容の紹介、エピソード、そしてそれらに関する考察となります。これらから授業の実態を推察していただければ幸いです。尚、当然ながらコース内で私が関わった以外に、進められた授業については詳しい知識を持ち合わせていません。ただこれらの領域と私の授業との関連はできる限り意識してきたつもりです。

この小論を書く最初の動機となったのは、この間の視覚芸術コースの授業内容、そして取り組みを、私が関わった範囲ではありますが、これまで見守ってくださった方々に対して、できるだけ正確に示す必要

があるのではないかと感じたからです。アート・リベラルアーツのアイデアのもとになったものは割と初期から醸成されていたものです。

この7年間の歩みの中には、上手くいったこともあれば、失敗したこともたくさんあります。泣いたことも笑ったことも、お互いに苦しんだことも多くありました。もともと人づきあいが苦手な、私という人間に付き合ってくれた、学生たちに最大の感謝をささげ、彼らにこそこの小稿を贈りたいと思います。

周知のように視覚芸術コースは、来年度の卒業生をもって幕を閉じることとなりました。これまで関わった者としてすべての関係者に心から感謝申し上げたいと思います。その意味からも本稿が崇城大学芸術学部の今後の発展のためにわずかでも寄与することを願うものです。

1. 私が赴任したころの視覚芸術コース

2015年秋、視覚芸術コースの非常勤講師として、学生の指導に携わる機会をいただきました。私が着任したころの視覚芸術コースは、入学した学生が当コースのカリキュラムを基本にしつつも、1、2年次に、洋画、日本画、彫刻、芸術文化の各コース、デザイン学科の授業をいくつか体験し、最終的には、一つの専門コースの指導の下、作品を制作するというスタイルのものでした。このコースの未来の可能性に期待する人たちの間では、視覚芸術コース独自の教育方針を模索していた時期であったと思います。

担当の永田郁教授と話し合う中で、私たちには当初から合意していたことがいくつかありました。その一つに、このコースで学んで、卒業していった学生たちが、美術の分野に進むにしろ、他の分野に進むにしろ、ここでの学びを生かして、力を発揮してもらいたい、特に創造的力を発揮してもらいたいというものでした。つまり、私たちには、芸術を通して人間教育をしたいというビジョンがあったのです。模索してきたのは、そこに至る具体的な手法についてでした。

結論から言うと、7年の歳月を経て、視覚芸術コースの教育の志向性はかなり成熟してきたように個人的には思っています。一言で言うと、コースにリベラルアーツ的な雰囲気が出てきたのではないか、というのがその認識です。リベラルアーツとは、異なる専門分野間の個別概念を止揚するより高い抽象概念を理解することができる、いわゆる全体人間の育成を目指す教育のことです。言葉は難しいですが要するに専門バカにならず、わがコースで言えば、アートを足掛かりとして創造的で広やかな思考ができる人間の育成と言えるでしょうか。

初期に考えていたこと

2015年の前期には、私の妻であり彫刻家である野島マーサが一足早く、同じく非常勤講師として授業をスタートさせていました。本来ならば、私も同じように前期からスタートするべきでしたが、その年はすでに、オランダと、スコットランドでのアーティストインレジデンスに参加するなど、7か月間のヨーロッパ滞在が、予定さ

れていたのです。

実は最初のころ、若い後進に授業をするにあたって、これまで彫刻家として経験してきたことや、いろいろな国の様々なアーティストたちと会って、見聞きしてきたことを伝えれば何とかなるのではないかと、心のどこかで考えていました。ところが授業が始まって、学生たちと接するにしたがって、このような考えでは、はなはだ不十分であることを痛感したのです。そこから、私自身が学びながらの、試行錯誤が始まりました。ちなみに、非常勤講師として働くことが決まってから、ヨーロッパに渡りましたが、現地での制作の日々にあって、学生たちに伝えたいことを日々思索し、ノートに書きとっていきました。そこで私が考えていたことは、芸術という分野を学ぶことの豊かさと、個々の人生におけるその意味についてでした。それが私の授業の大まかな構想でした。

非常勤講師として行った最初の授業は、永田先生の要請で、3年生にインスタレーションを教えることでした。2年生には私の考えでドローイングを教えました。インスタレーションの授業で、学生に一番関心を払ってもらったのは、自分が意図したことを素材の上に実現するということです。結果は学生によって、様々でした。自分のアイデアの説明のような作品になってしまったものもあれば、大量のペットボトルを使ってなかなか迫力のある作品もありました。並行していた野島マーサの授業で、自然を見つめ、そこからテーマを見つけた学生もいました。



2016年に行われたサードフロアーの様相

意図したことを素材の上に実現することが作品を制作するという。私はこの命題を「イメージを実現する」と名付けて、その後の授業の骨格とすると同時に、それについての研究を広げていくことになりました。

抽象度を上げる

彫刻家である私が、彫刻以外のコースで、ものづくりに関することを教えるという場合に、何を教えたらいいいのか、大変な宿題であるように思われました。試行錯誤の結果、いわば考え方の抽象度を上げればいいことに気づきました。抽象度を上げるとは、例えば彫刻と絵画では表現は違いますが同じ美術に属します。今度は彫刻や絵画は音楽と表現は違いますが、同じ芸術という分野に属します。さらに芸術分野と宗教哲学といったものは人文科学という分野に属します。そして人文科学も社会科学も自然科学もすべて人間の営みにほかなりません。これがとらえ方の抽象度を上げるということです。

彫刻を作るという行為一つとっても、実際には技術以上の大変多くの要素が包含さ

れています。ですから様々な角度から物事を考える必要があります。私自身がそのように内省することで、ものを造ることに關して幅広く語る道が開けたと思います。

イメージを実現する

彫刻の制作においては、石や木などの実素材を扱うことから、“実現”するというプロセスを具体的に踏むこととなります。このイメージを実現するという感覚は、私にとっては肌で感じるができるものでした。

作品を作るということには、自ら問いを立て、こういうものがあたら素晴らしい、というイメージをし、それを実現する、という一連の総合力が必要です。この能力は敷衍して言えば、例えばベンチャー企業を起業するそれと似ているとも言えないでしょうか。

例えば、人間の幸せな在り方に関心を向けた人が、たまたま自然食品に目を向けるとその奥深さに感動した。やがて自然食品のレストランを開きたいと思うようになった。それがイメージです。そしてそれを実現するためにはいろいろな要素があります。その自然素材をどこから仕入れるか？シェフは？ どんなスタイルか？ 内装は？ 資金繰りは？ スタッフは？ ものが在るということは何らかのシステムに依っているのです。それを自ら作り出す力が実現力と言ってもいいでしょう。

これからのアーティスト像について

さてここで将来的には上記のこととも関連してくるであろうビジョンについて論じ

ておきたいと思います。

私が美大生だった1980年代や、それ以前の時代においても、美大の卒業生の人口は決して少ないものではありませんでした。その中であって、美術制作を生業として一生を過ごす人の割合は大変小さいものです。成り行きとして卒業後に作家として制作を続けているものが勝者、それができていないものが敗者、という暗黙の観念が卒業生をはじめ、美大を中心とした社会には存在していたように思います。しかも、美術だけで生活している人は、ほんの一握りで、作家として活動している人でも、それだけで自活している人はほとんどいません。何らかの副業を持っているものです。私も2012年にモニュメントの制作会社を立ち上げ、制作の依頼を受けても来ましたが、芸術家としての経済の在り方を様々模索してきたものです。

私個人の経験から言ってもそうですが、学生を観察してきた中で、私は美大生が経済やビジネスについて学ぶとよいと思っています。これらに関する授業があってもいいでしょう。美大生が自分の経済について考えることが安心して美術を学ぶための布石にもなるはずです。それが自分自身に対してより広い視点を与えることになるでしょう。ただ、それらの表層的なものではなく本質的なものを学ぶなど、パッケージとしてのデザインに配慮は必要だと思います。

ところで、最近美術界は件のビジネス界から注目を浴びていると言います。AIに対抗するために芸術家のものの見方を学ば

うという動きが出てきているというのです。これに関する著書も多くあります。人間の本当のクリエイティブな部分は、まだまだAIにも真似ができないということなのでしょう。(最近になってこのような前提も覆るかもしれないと思わせるほど技術革新の波が押し寄せてきています。)

このような時代の流れを見てみると、アーティストを取り巻く状況も大きく変化して来そうな気がします。一つには職業としてのアーティストと、それ以外の仕事をしている人はアーティストではないという考えがしだいに薄れていく。そして在り方としてのアーティスト、という考えが定着していくかもしれません。どのような職業についていても、創造的な在り方を常に実践できる人が「アーティスト」と呼ばれるようになるかもしれません。

そのように考えると、例えば日本という社会において、感性豊かで創造的な人々が増えていくこと、つまり心豊かな社会を作るために、逆説的ではありますが、もう一度芸術の力を借りなくてはならないということではないでしょうか。

最近の私の授業では、クリエイティブな状態に自分を持っていくための習慣や、様々な分野のクリエイターの着眼点などについて、学生と話すことが多くなってきています。このようなことを学ぶ意義は大きいと思っています。なぜなら、様々な分野で創造性を発揮して生きるにしろ、作家として生きるにしろ、このあたりの姿勢が卓越した存在であるための、あるいは幸せな存在であるための要因になるからです。

私が最初に掲げた「イメージを現実にする」というテーゼをもとにスタートした、授業の実践は、現在は新しいアーティスト像、あるいは創造的人間像を視野にとらえるところまで広がりを見せてきました。このような視座からも物事を眺め、4年間の美術制作を通して、創造的全体人間としてスキルを身に付けることが可能なのではないか。これは一つの仮説です。

2. 授業内容の紹介

私が授業で実践した内容をここで紹介します。ここにはエピソードやそれに対する考察も含まれます。記述は順不同ですが、大まかには美術的な思考や感覚を養うためのアプローチに関するものが多いと言えます。

触覚によるドローイング

スペインの巨匠、ジョアン・ミロも学生時代に実践したといわれています。目隠し板の向こうに置かれた、貝殻や木の枝など様々なオブジェクトを手で触りながら、鉛筆で紙に、その形状を写し取ります。触りながら、想像力を駆使し、三次元的なデッサンとして描いてもよいし、つるつる、ザラザラと言った感触を線の強弱に表現してもよい。

この実践は、共感覚を鍛えるためのものです。共感覚とは、異なった感覚器官で同じ事象を知覚できる能力のことです。例えばごつごつした岩肌を観て、肌で触った感じも想像できるし、棒でたたけばどんな音がするかも、なんとなく想像することがで

きる。誰にでもある能力ですが、この能力が際立ったものに、絶対音感や、文字を観てそこに色を感じるといったものもあります。共感覚の能力は、実は作品を作るときの根本条件となるものです。自分の中に感じているものを絵に描く場合、内面の“感じ”を共感覚によって色に変換するのです。さらにはもっと複雑な概念、ハーモニーやリズム、奥行き、感情などを色や線の無限の組み合わせで、表現することができます。個々が持っている共感覚のお陰といえます。実践した学生も最初は戸惑いながらも、難なく形を写し取っていききました。

音楽を聴きながらドローイング

これも共感覚を育てるためのものです。ここでのポイントは、“質”についてのアプローチを意識することでした。素晴らしいクラシック音楽や、現代音楽、ジャズなどを試しました。つまり音楽から伝わってくる質の高い音に、自分の感覚を合わせ、それを感じ取り、線にあらわしてみようという実践です。自分の外側から聞こえてくる“質の高い”音を知覚して、そこに心地よさを感じたりするときに、それは、とりもなおさず、自分の内部にその“質”を認めたことになるのです。

学生の中に、音楽を聴くことによって、イメージが広がり、どんどん線が描けていく人がいました。芸術文化コースの学生で、ピンポイントでこの授業に参加していたのでした。本人も普段はあまり描くのが得意ではなかったので、自分でも驚いていました。

天地反転ドローイングもしくは絵画制作

ミケランジェロの素描、ピカソの絵画、ルノアール、ジェリコー、様々な図版を大判プリントにしたものを、天地反転させてイーゼルに固定します。それを反転したまま模写する実践です。人間の視覚の機能は日常生活においては、意外なほど、ものを観ることに使われていません。例えば、朝、Aさんに会って挨拶をします。その時、「あ、Aさんだ」、と知覚したら、ふつうはそれ以上観るのをやめてしまう。そのとき視覚は、頭の中にあるAさん像と一致するかどうかの、確認作業をするだけのために、使われるということです。しかしそれは視覚が鈍感であるという意味ではありません。「顔色が悪いな、気分が悪いのかな」ということも瞬時に感じ取ることもできます。しかしこの場合、視覚だけではないほかの感覚器官も動員して、Aさんのことを観察しているといえるでしょう。

絵を描く場合の観るとは、このような視覚の使い方とは異なるということです。あくまで一面的な言い方をすると、この場合の観るとは、ありのままに観るということです。ただ、その見方自体もかなり多様です。認知科学の見地から言うとそれぞれ人によって見ているものが全く違うということになります。それにしても、それぞれが見る世界を、ありのままに観ると言えいいでしょうか。天地反転ドローイングは、このありのままに観る目を育てるための実践です。

反転されたイメージは、頭の中で固定された観念に衝撃を与えます。それによって、ものを観る時に、視覚にかかっていた

バイアスを取り除くことができます。学生は、無心に線を追うことができるようになります。人体の腹部のふくらみだったところが、広大な丘陵地帯のように見えたりすることもあるでしょう。ありのままに観ることによって、物事の本質に迫っていくことができます。実践した学生が、思いのほかのびのびした線を引いていました。ただこの学生は、自分の描いた絵があまり気に入らなかったようです。本人はもっとうまく描きたかったのです。しかし本人が気づかなくても、そこに進歩があったということはたくさんあるのです。

伝統的なデッサンにもこのような目を育てる作用があります。ここに固定観念を打ち破る創造性の揺籃があるのです。



2018年の天地反転絵画制作の様相(2年生)

日本語のレトリックを学ぶ

日本語のレトリックの本を一冊ずつ与えて読んでもらいました。言葉における修辞法の理解は、視覚による修辞法の理解への第一歩となると考えました。母国語に習熟することは、あらゆる学問の基礎になるという研究も存在します。ここで重視したのは、比喩法、特に隠喩についてでした。隠

喩は「それ」と似たものを示し、「それ」の存在をほのめかす、いわばずらしの手法ですが、切れ味鋭く、「それ」の本質を浮かび上がらせることができます。視覚表現においても、ある素材やモチーフを「借りる」ことによって、自分の思考や知覚したことをうまく表現できることがあります。

物語からイメージを想起する

野島マーサが中心になって行った授業です。野島マーサはアメリカで公共彫刻をはじめとして多く彫刻作品を制作してきました。彼女が最も得意とする手法が、物語からイメージを想起する方法です。文学的なモチーフが、素材の上に成形され着彩されます。そのようなオブジェが縦横に構成された不思議な雰囲気醸した人物彫刻です。彼女の作品は視覚的なレトリックにあふれています。

この授業は、マーサと協力して、私もいくつかの授業で実践しました。まず文章で、何らかの物語を書いてもらいます。自分の興味のある分野の本の中から、または野外を観察した記録、思いつくままの物語でもよい。

読書が好きなある学生は、画家とモデルの恋について書かれたある物語の中から、作品のイメージを抽出しました。画家の絵が完成すれば、画家とモデルは別れなくてはなりません。画家と別れたくないというモデルの気持ちを表すのに、この学生は木製の巨大な筆を制作することにしました。杉の角材から鑿とグラインダーで直径15cm長さ1mの筆の柄を彫りだしました。ともかく重くて持ちにくい筆です。さらに

持ちにくいようにわざわざ、厚い樹皮をちぎって柄の部分にランダムに張り付けます。しかも、画家が、持ちたい気持ちにならないようにと、悪趣味な極彩色で着色しました。筆が極限まで使いにくければ、絵の制作は、限りなく遅くなる。それだけ、モデルは画家と一緒にいられるというわけです。その切なくも、一瞬を永遠に引き延ばしたようなモデルの気持ちを見事に表現したと言えます。この場合、この作品は、モデルの気持ちの表現にとどまらず、物語全体を比喩的に表現しているともいえます。実現した作品は鑑賞者を再びイメージの世界に連れ戻します。イメージ、思考の世界に時間と空間の制限は存在しません。

授業は2年次のものですが、この学生は、3年次の自由制作、さらには卒業制作に至るまで、この手法を発展させていくことになりました。

オブジェに着彩

様々なスクラップ、木の枝や、貝殻、流木などに着彩をします。立体的な絵画作品にすることを目的にしました。これらのオブジェにはもともとそれらの情報が含まれています。壊れたハンガーには壊れたハンガーの情報、枯れ枝には枯れ枝の情報、といった具合です。その上に着彩するという事は、もともとある情報が包含された作品になります。それらの情報が、様々な色や線を引き出すのでしょうか。またそうでない選択も存在するのでしょうか。

針金による立体ドローイング

まず最初に、ペアになってお互いをス

ケッチします。その際、対象から目を離さず、画面は見ません。そして一度も鉛筆を紙から離すことなく、一筆書きで完成させます。

次に針金を用意して、紙上のドロ잉の通りに、ペンチで曲げていきます。やってみると、最初にコツをつかむのに苦労することがわかるでしょう。鉛筆で自由に走らされた線の奔放さ、伸びやかさを針金で追っていくときに言い知れぬ違和感を感じるでしょう。しかしだんだんとできるようになります。そして鉛筆の線が、針金の線に変換されたときの存在感に驚くでしょう。この授業のポイントは、この違和感に違いありません。この違和感こそ、感覚が実素材の上に飛翔していくときに感じるプロセスなのです。

100枚ドロ잉

2分に1枚、あるいは5分に一枚というペースで、8つ切りか4つ切りほどの画用紙に線または色をつかってドロ잉を施します。時にはペインティングになることもあるでしょう。狙いは様々に設定できます。音楽を流しながらその印象を即興で描いたり、何かこちらから語り掛けてイメージを膨らませたりしてみます。大きい筆で描いたり、野太い炭を使ったり。これらは即興的なもの。自分の一瞬の感性に焦点を当てるタイプです。他にもともかく時間をかけて思いつくものを紙いっぱい描くというのがあります。この場合は、自分の中から何も出てこなくなるまで描く作業の中で、自分の知らなかったものに出会うこともあります。広島市大学芸術学部などで

も実践しています。



2017年100枚ドロ잉の授業(2年生)

壁や床のシミを撮影する

それぞれの個人には、独自の感性や思考の癖のようなものが存在します。それは後天的なものもあれば、先天的なものもあるでしょう。この実習では、グルーピングという概念を使って、自分の美意識や思考の一端を知ることができます。物事を観る時、人はそれぞれ自分の中にある基準によって見えています。別の言い方をすれば、自分の目の中にあるものしか、実際には見えていないのです。人は、例えば、壁のシミ、木の節目、雲の流れなど、ランダムなものを観た時、自然と自分の見方で見て、そこに意味を見出そうとするものです。多くの人は子供の時にはよくこうやって遊んだことがあるのではないのでしょうか。

それぞれがカメラを持って、実習室の床や壁にあるシミや、傷、などを撮影します。対象にレンズを向けてファインダーをのぞいた際、一呼吸おいて、あたかもそこに抽象画があるようにそれらのシミを配置します。あるいは、自然と自分が観たいように観てみましょう。ポイントは、ファイ

ンダーに写っているものを自分のイメージに変換することです。

海の波を数えてみよう

学生には、「卒業して10年くらいたった時に、あんなこともやったなど、思い返してもらえればいい、そういう授業だよ。」と言って実施しました。

熊本港からフェリーに乗って島原港へ。そしてすぐに折り返して熊本港に帰ってくるというものです。船の上から見えるものはいろいろあります。広大な海、波、潮目、天草の島々、青い空、広がる雲、さらには、波の動くさま、風の匂い、移り行く陽の光、など。これらのものをゆっくり味わってみよう、それだけの目的です。

さてこれらのものは、旅の途中にも観ることができます。例えば、島原に用事がある、そのために船に乗る場合です。しかしこの実習は、そのような目的はありません。ただ行って帰ってくるだけです。目的は、船に乗って海に出る、それだけ。つまり非日常を体験する訳です。普段自分があまり考えないところに身を置いてみることを促しているのです。学生の皆さんもスイッチが入ったように、じっと海に見入っていました。

ツリーハウスの制作

野島マーサが主導して実施した授業です。およそ半期分丸々使ったの大プロジェクトです。千々石海岸から拾ってきた流木だけを使って木の上に巨大な物見やぐらを作った学生、廃材も織り交ぜて作った学生。子供のころを思い出せて単純に楽しい

授業でした。制作が冬の寒い時期に差し掛かってくると、外での作業は手足が凍えます。しかし春になったら、ツリーハウスの中から桜を眺めることができました。

流木を立てる

海岸に行って、石を積み上げたことがあるのでしょうか。絶妙なバランスが必要になりますが、意外と高くまで積み上がったりするものです。人体も絶妙なバランスで立っていて、それが崩れると、すぐにでも倒れてしまいます。かたや片足で立つことだってできます。細い足一本で全身を支えます。それでも人間はバランスを保つことができるのです。

この実習は、流木を立てるという単純なものです。細くて小さな3本のくぎを使ってバランスをとります。遠目に流木が何の支えもなく立っているように見せられれば良いわけです。長い流木になると、なかなか立てるのはむづかしい。中にはグネリと曲がったものもあります。しかし、必ずそれが立つポイントは存在するのです。学生は、釘の位置を入念に見定め、何度も失敗を繰り返しながら一つ一つ立てていきま



2018年 「流木を立てる」 展示風景(2年生)

す。全員で廊下いっぱい流木を立てたインスタレーションを完成させました。中には、最後まで一つも立てられない学生もいました。ちょうど、体育の授業で、鉄棒の逆上りができない時のような気持ちでしょう。しかし練習していると、いつかはできるようになります。この実習をやっているうちに、自分が立っていることの不思議さを感じるができるかもしれません。

千々石プロジェクト

千々石プロジェクトは、野島マーサの発案で始まったプロジェクトです。このプロジェクトでは、社会的なテーマをもとに作品を制作するのが目的です。長崎県雲仙市千々石町にある海岸は、私たち夫婦が住む島原市から、車で30分移動したとこにあります。この海岸には、海流の影響で、大量の資源ごみが流れ着きます。中には韓国や中国から流れ着いたものもありました。

数年次にわたって、学生たちを千々石海岸に連れて行き、場所を観察し、主に環境問題に対する観点から作品制作を試みました。野島マーサのクラスでは、世界の海に漂流するごみの実態や生物に対する影響などをリサーチしてディスカッションを深めました。

またそれらへのアプローチを試みた世界中のアーティストの作品をSNSを通して知ることともなりました。社会問題に対するアーティストたちのかかわりは、西欧、アフリカ、アジアにおいて、表現の媒体としてごく自然になされていることがわかります。アーティストと社会がリンクしてい

る様子を見ることができます。日本においてはこのような事象はまだ希薄であるように見える、これはアメリカでアーティストとして活動してきた野島マーサが感じたことでした。

「ごみ」プロジェクト

千々石海岸で集めてきた大量のごみを使ってインスタレーションを試みました。プラスチックの容器、空き缶、ペットボトル、流木等、海岸に打ち上げられた様々な漂流物を天井からつるして、海面の漂流ごみを海洋生物の視点から眺めることを意図したインスタレーションです。大量のごみを天井からつるす作業は幾日にもわたります。2019年2月(2018年度2年次)の硯川実習棟での展示では、中村前学部長、勝野学部長他、諸先生方の講評も得ることができました。

その後学生たちは、この展示を本学キャンパスでも行いたいと発案しました。永田先生が起案書を作成し、学長の快諾を受けて2019年6月(2019年度3年次)に実行した本学の展示には、広報の応援もあり熊



2019「ごみ」プロジェクトの硯川実習棟での展示風景(2年生)

本県内各紙、テレビ局の取材を受けることとなりました。

環境問題に対する意識は、近年一般市民にも浸透しつつあります。しかし実際に身近なところで行動を起こそうという人はまだ少ないかもしれません。彼女たちの行動はこのような人たちの背中を押す役割を果たしたはずです。そのことを自覚し誇りにしてほしいと思います。

自由制作（サードフロアーへ向けて）

3年生になったら自由制作となります。1、2年次で学んだことを生かしつつ、自分なりのテーマを探して作品化します。ショート、ミドル、ロングと期間を区切って、実験的な制作から徐々にボリュームのある作品（単に大きさだけではありません。）を作ります。そこでは講師たちが、各学生の自由制作をサポートしていきます。場合によっては前期中などに、あくまで自由制作を支えるための特別な技術の指導を行うこともあります。

サードフロアーは永田郁先生による企画で、視覚芸術コースの最大のイベントです。3年次の自由制作の最終段階では約3か月をかけて、3年間の集大成としての作品を制作します。サードフロアーとは、視覚芸術コースの学生のアトリエがある、硯川教室の3階フロアーのことを指します。教室をすべて片付け、ギャラリーとし、展示室としたことからこの名前が付けられました。この展示に向けて、学生たちは、授業の時間以外も遅くまでアトリエに残って制作をしました。渾身の大作をそれぞれが展示します。2年生、1年生もそれぞれの

課題作品を展示します。展示会当日には、ギャラリートークが開催されます。学生の皆さんはスピーチによって自分の作品の意図を表現します。他コースの先生方も参加され、様々な指導を受ける機会にもなりました。

3年生においては作品とともに、作品制作に関するドキュメントブックも展示します。2000字以上の文章と写真によって、制作の意図、プロセスなどを表現します。この作業は学生の皆さんの思考を整理し、深め、気づきを促します。視覚芸術コースでは永田先生の指導によって、このドキュメントブックが一貫して重視されてきました。ちなみに卒業制作におけるドキュメントブックは5000字以上の文字と写真で作成されます。私はこの作業が美術制作を創造的思考や展開につなげる懸け橋の役割を果たしていると思っています。

よりみち展

永田先生が企画した、コミュニティーとの協働を意図した展覧会です。私や野島マーサの時間も使って制作を行いました。3年生になると（昨年は2年次に実施）熊本市内のくまもと森都心プラザ図書館内に展示を行います。図書館のスタッフの皆さんと学生が、何度もやり取りをしながら協議をし、テーマを決め、イメージを固めていきます。主に本の中からテーマを取り上げることが多かったようです。学生たちは協力して展示物を完成させます。子供たちのためのワークショップも開催されました。

視覚芸術コースでは、永田先生を中心に

コミュニティーと交流活動は活発に行われてきました。この活動はコースの重要な核と言っていいものです。他にも河原町プロジェクト、古町プロジェクトなどがあります。永田先生のレポートもありますのでそちらの方もぜひご参照ください。(総合文化誌KUMAMOTO # 39, 41 参照)



2020年 よりみち展のポスター
(3年生が展示作品とともに制作)

ここまでがいわば実習の内容となります。

3. 学生の成長のエピソード

家具を作った学生

私が視覚芸術コースで関わったすべての学生で、私より才能が劣ると思った人は一人としていません。たとえ、学業半ば、退学していった学生も例外ではありません。これは決して誇張ではありません。なぜなら才能というのは、独自のものだからです。そして厳密には、この部分は私のほうが勝る、ここは劣る、という言い方も妥当ではありません。才能とは、文字通りその人を表しているものです。だから一人一人

に接するとき、体感としては常に圧倒されることになるのです。

在学中の課題制作において常に抜群の造形センスを発揮した学生がいました。この学生は、3年次のヨーロッパ研修でいろいろな美術館を巡る機会を得ました。絵画作品なども良かったが、むしろ、それを納める額縁の素晴らしさに感動したと言います。それで3年の後期には、額縁を作りたいと私に言いました。私は、学生が一つのことに集中せず、あちこち関心を向けることを悪いとは思いません。むしろ、若いのだし、いろいろ感化を受け、熱狂するのは自然なことだと思います。3年の後期は私の勧めで、いろいろな素材でたくさんの額縁を作りました。その時に私が意図していたのはフレームの持つ普遍的な意味について、いろいろな素材を通して感じてほしかったのです。鉄、石、珊瑚、木材、粘土などで彼らしい造形センスを発揮しました。

ところがついに彼が卒業制作で家具を作りたいと言った時は、はたと困りました。彼がやりたかったのは、ヨーロッパの美術館で見た、クラシックな家具だったので。これは職人の世界です。ちゃんとしたものを作れるようになるまで、ざっと10年はかかります。彼がいくらセンスがいいといっても、ちょっとした真似事で終わるのは目に見えています。しかし彼は初志を貫徹し、硬いヒノキで立派な家具を作り上げました。

当時私は、彼にはもっと彼の造形感覚を存分に発揮した作品を作ってほしいと思っ

ていました。

しかし今は考えが変わりました。彼には変な欲がなかったのだと思います。ただ思ったことをまっすぐにやったのです。これは素晴らしい資質ではないでしょうか。就職も学部を通じていの一番に決めました。そして彼なら、今、その職場で楽しく頑張っているに違いありません。

何もできなくなった学生

3年生の自由制作になって、何をやらいいかを決めるのはなかなか難しいことかもしれません。また、やりたいことがあるのに、実際に制作を始めることができない学生もいます。ここが、私が視覚芸術コースの授業で一番苦労したところであり、急所でもありました。

ある学生は、読書もよくしていて、現代美術などに対する知識もあるという子でした。ヒアリングの段階で、とても面白いと思えるアイデアを出してきました。

「いいね、それやろうよ。」

「はい」

とスタートするものの、なかなか進みません。肉塊をフィギュアに埋め込み、その変化していく様を観察するというものだったと記憶しますが、仕事は最後まで進みませんでした。本人もあきらめてしまいました。

この例は典型的です。頭の中では素晴らしい作品ができています。しかしそれを現実にするときの困難さに逡巡するというのでしょうか。イメージを現実にするための一里塚というものは、実はいくつもあるものです。ある意味、それを想像してしま

う人は余計恐怖を感じるようになるのかもしれません。実はこれ、私自身が長い制作活動を通して、いやというほど経験してきたことです。

4. 制作における指標

自ら学ぶ心をもって基礎とする

制作の手が止まってしまう理由はほかにも存在するかもしれません。私は、基礎も十分に積まないまま、いきなり表現活動をしようとしても、つまずくだけだ、という意見があることを承知しています。実際にある高校の先生に、視覚芸術コースの説明をしたときにそう言われたこともありました。私自身も東京造形大学の彫刻科というところで、おおむねそのような考えのもとに育ってきたからよくわかります。

これについては柔軟に考えることが可能ではないでしょうか。つまり道筋はいくつもあるのです。例えば、アメリカの美術教育では、(これは野島マーサが学生時代の話です) いわゆる日本でいうところのデッサンという授業はありません。代わりにドローイングはあります。(語源においてドローイングとデッサンは英語とフランス語の違いというだけで、意味は同じです。) アメリカにおけるドローイングは日本の在り方と違って、もっと主観が入ったものです。マーサの話ではそれにさえ、それほど時間は取らなかったそうです。何より重要視されたのは、自分の声を見つける **(Finding Your Voice)** ということであったそうです。自分の関心ごとへのアンテナ

を張れ、ということと言えるかもしれません。この考えは野島マーサや私の授業では重視してきました。日本にも「足下の泉を掘れ」という言葉があります。他人の意見から自分の意見を組み立てるのではなく、他人の意見に埋もれた本当の自分の声を聴け、とも言えましょうか。この声は自分で関心に向けて、大事に育てなければ、すぐに見えなくなってしまいます。もっとも自分の考え方やアイデアは全くゼロから生まれることはありません。どこかで見聞きしたものです。しかし、自分がどこに関心に向けるかということ自体に、自身の才能の芽があるのです。ちなみに、アメリカでは、美術史の勉強にはかなり力を入れるそうです。

基礎がなければ、いきなり表現することは難しい、と一定の数の学生も思っているようです。しかし、一度考えてみましょう。なぜなら、こうでなければならぬという思い込み自体が、自身の可能性を制限している場合が多いからです。例えば大変写実的な人物が描かれた絵を描きたいと思ったとします。そこで自分はデッサンの勉強をしていないから無理だと思ってしまおうとしましょう。しかし、本当はそのような絵を描きたいと思った時点でデッサンや技法の勉強を始めればいいのです。そうすれば情熱が努力を支えてくれることになります。本人がその気にさえなれば、それを支えるソースは大学にはあります。ほかのタイプの作品に魅力を感じたとすれば、その人はその作品の魅力の秘密を一生懸命掴もうとするでしょう。

さて以上言ったことは、基礎とは何かという問いかけになっていることに気づくでしょう。基礎とは端的に言うと考え方や行動の基（もと）になるものです。つまりそれを信じているのです。そしてそれが自分のすべてを規定します。ですから基礎とはとても大切なものです。それに対して自ら問うこと、そこに大きな可能性が開けます。私はこのコースにおける学びの基礎をどのように設定するかを考え続けてきました。学生にも自ら学び自身に問いかけてほしいのです。あえて言えば、私は自ら学ぶ心をもって基礎と設定したいと思います。単純に思うかもしれませんが、ここに立てば自然と道が開けるでしょう。もう一つそう思う理由を挙げるとすれば、芸術は教えることができないということです。考え方や技法は教えることができます。しかし自分の中にある芸術を顕在化させるには自分が自分の道を見つけるしかありません。そしてその道を進むのです。知識は自身の直観をつないでくれます。そして形として表現するための素材にもなるのです。学ぶことは楽しみとなり、自分の天分と世界を繋ぐこととなるのです。

ともかく完成を目指せ

アイデアはあるのに、実際にどうしたらいいのかわからない、手が進まないという問題は、やはり丁寧に扱っていく必要があると思います。ここは異論があろうかと思いますが、私個人としては、学生にこの4年間でそこまで完成度の高い作品を期待していません。これからの人生で何か基本に

なる考え方を身に付けたり、必要な体験ができれば、それで十分ではないかと思っています。本当の作品は、卒業した後に作っていくのですから。(もちろんこれまではびっくりするほど素晴らしい作品もたくさん作られてきたことも事実です。)

しかし、学生が制作に臨んで、ただやみくもに手をこまねいているのを観るのもつらいものだし、本人たちも私以上につらい思いをしていることでしょう。だからその問題も学生と一緒に考えていきたいと思えます。その研究自体も必ず将来役に立つことがあるでしょう。

例えば、1960年代のアメリカで、マクスウェル・マルツという人が「サイコサイバネティクス」という概念を提唱しました(マクスウェル・マルツ著 Psycho-Cybernetics 邦題：自分を動かす 参照)。スペインの巨匠ダリもこの考え方を取り入れたといいます。この概念におけるものの考え方とは、人間がひとたび目標を持つとそれは必ず達成できるということです。

例えば、発射されたミサイルには、自動着弾装置がついています。この装置のお陰で、爆破対象のジェット機がいくら旋回しようが、それを追いかけていき最後には必ず撃墜します。これと同じように、人間は、やろうと思ったことを実現するために、必ず、必要な方法を見つけるということです。たとえその方法が今見えていなかったとしても。人間の脳はそういう風にできているといいます。

だから例えば、あるアイデアやイメージを実現しようと思って作品を作るとすれ

ば、あきらめない限り、その作品は必ず完成するということになるわけです。この考えには私自身の経験から強く共感しました。作品ができるまでには様々な風景が自分の前を通り過ぎていきます。しかしその風景は、前もって予想されたものではないことがほとんどです。むしろ予想をはるかに上回る数の風景が目の前を通り過ぎて行ってこそ、作品というものは出来上がるのです。それは私が石の作品を作っていると同じことです。ただただ完成を目指すときに、必要なだけのプロセスを踏んでいることに気づくのです。

才能ということについて

最近私は、学生たちに、「君たちには才能があるよ。だって医者になりたい人は美大には来ないだろう?」と言います。自分が選んで行動を起こしている時点で、自分の才能を自分でわかっているということです。

作家の本田健氏が、才能について、面白いことを言っています。それは、自分があこがれを抱く対象には、自分にも才能があるということです。例えば、ある人の講演会を聞いた後に、「ああ、感動した。素晴らしい話だったな。」と思うか、「ああ感動した。自分もあんな風に話してみたい。」と思うかの違いです。自分もやってみたいと思う人には、その対象に対して才能があるということです。

この説は、大変説得力があると私は思っています。この場合、才能とは適性のことでしょう。本田氏はさらに、人にはいくつもの才能があるものだ、その才能を掛け合

わせれば、だれも追いつけないような結果を出すことができる、と言っています。

学生は、自分は絵が好きだ、ものを造るのが好きだ、ということはわかっていますが、ほかの才能に思いを致すことはあまりないかもしれません。しかし大学にいる時間は、そのようなことにも注意を払うチャンスがあります。例えば、人とのコミュニケーションが得意だったりします。論理的に考えるのが得意。企画をするのが好きだったりします。諦めが悪いというのも才能です。決断力があるという才能。決断力がないのは、熟考するタイプだったりします。絵を描けるということは、思考に柔軟性がある可能性が高いし、形を作るのが得意ならば、対話力がある可能性が高い。なぜなら形を作ることは文脈をつなげることだからです。これらの才能を掛け合わせてどのような人生を織り上げていくか、そのような視点を探るとおもしろいのではないのでしょうか。

文字通り美術作家としてやっていく場合もあるでしょうし、会社に勤めたり、自分でビジネスを始める場合だってあるでしょう。それに作家としてやっていくという場合にも、素晴らしい絵が描けるという才能以外の才能も必要とされるのではないのでしょうか？

もちろんどのようにしてその才能を磨くのかということが大事な課題です。そこにも様々な重要な要素があります。

さて、これだけ才能について語っておきながら矛盾するようですが、若い人のため

に以下のことは言っておきたいと思います。自分自身の価値というものは、才能や能力によって測られるものではないということです。才能や能力だけに価値を置く生き方は結果的に常に他人と自分を比べることになるでしょう。そこに本当の満足はありません。たとえどんな自分であろうと、自分自身そのものに無限の価値があるということです。才能や能力はそのような自分の表現にすぎません。前提としてそのような視点がとても大切です。

5. こぼれ話

ある企業の質問

視覚芸術コースのある学生が、就職試験に臨んだ時のことです。面接官が、その学生に質問しました。

「大学ではどんなことをやってきたのですか？」

学生は少しため息交じりに答えました。

「私のいたコースでは、本当にいろいろなことをやってきました。」

面接官は言ったそうです。

「それは素晴らしい。」

面接官はなぜこう言ったのでしょうか。私なりに思ったのは、こういうことです。

(みんなで議論しても面白いでしょう。)

それはたとえ浅くてもいろいろなことを経験しているということ。そしてそのいろいろなことの間のことについても考えてきたかもしれないということではないのでしょうか。平たく言うと、どんなことにも対応できる柔軟性がはぐくまれている可能性があるとその面接官は考えたのかもしれない

ん。

この面接官にとって、学生が一つのこと
に熟練しているかどうかは、あまり関係が
ないのでしょうか。なぜなら多くの場合、熟
練は必要な場所で必要な時にしていけばい
いからです。もちろんこうでなければいけ
ないと言っているわけではありません。

まとめ — アート・リベラルアーツの提唱

以上視覚芸術コースでの7年間を振り
返ってきましたが、最後に「アート・リベ
ラルアーツ」について記してまとめにしたい
と思います。

「アート・リベラルアーツ」の概念自体
はそれほど複雑なものではありません。言
葉で表すと「社会で活躍する創造的全体人
間を育成する美術教育及び研究」となるで
しょうか。

美大の授業は今のところ技術習得が中心
と言えると思います。しかしある意味その
ような制限の中でも、大方の美術教育関係
者の間では、美術教育が創造的全体人間を
育成することにあると俯瞰されているので
はないでしょうか。なぜならそれが美術、
あるいは芸術というものの属性であるから
です。芸術というものが生まれた起源もま
さにそこにあります。教員自身が個々の体
験の中で生き生きと感じていることでもあ
るでしょう。

美術教育の現場は、各機関で合意した考
えのもと教員の皆さまの日々の努力の上
に成り立っています。そこには様々なドラマ

があり、様々な価値が生まれていること
でしょう。

その中であって、「アート・リベラル
アーツ」は、これまでの美術教育の概念の
中に埋め込まれていた一つの本質的な要素
に新たに注目し、具体的な行動として出現
させるものになるのではないかとおもわれ
ます。

新しい考えというものは、多くの、ある
いは非常に多くの人々の中にすでに予感さ
れているにもかかわらず、その時代の常識
ややり方に埋もれていることが少なくあり
ません。新しい展開を進めるために留意す
べき点は、このようなグランドアイデアを
実践するにはどうしたらいいかを真剣に考
えていけば、おのずと多くのアイデアが生
まれてくるはずだということです。そして
それらのアイデアは、もっと多彩な人材か
ら、もっと長期的に永続的に湧出されてい
くことになるでしょう。それが理念もしく
は前提というものの力です。

さて、最後に少しだけ想像をたくましく
してみましよう。私の印象では、「ア
ート・リベラルアーツ」は本来の目的を考え
れば、高校教育で広く普及するとよいと感
じています（小中では図工美術の時間の拡
充！）。そして大学では専門性を深めてい
く流れがよいのではないのでしょうか。

各教育機関で今後、新たな機運が熟し、
そしてある程度完成した「アート・リベ
ラルアーツ」の形が形成されてきた暁にはど
のような姿が想像されるのでしょうか。例え
ば、呼び名は変わっても様々な大学で様
々な特性を持った「アート・リベラルア

ツ」が展開されていることになるでしょう。もともと絵や彫刻に興味のない幅広い人たちが学んでいくことにもなるでしょう。

美術を学ぶすべての人たちの未来が明るいことを祈りながら本稿を終えたいと思います。

視覚芸術コースで同じ非常勤講師として、コースの理念の必要性を話し合った、故・林浩先生に本論を献じます。